

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究(2)」

2020年度第1回研究会（通算第3回目） 報告書

日時：2020年7月4日（土）14:00-17:30

場所：Zoomによるオンライン開催

使用言語：日本語

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」

1. 黒島規史（AA研共同研究員，熊本学園大学）

「朝鮮語の「時間的副動詞+焦点助詞」：条件文を中心に」

2. 蝦名大助（AA研共同研究員，関西国際大学）

「カムサ語の類別詞」

3. 全員

今後の研究計画の打ち合わせ

報告者：児倉徳和（AA研）

今回の研究会では2件の研究報告と討論がおこなわれた。以下に発表要旨と議論の概要を記す。

1. 黒島規史（AA研共同研究員，熊本学園大学）

「朝鮮語の「時間的副動詞+焦点助詞」：条件文を中心に」

朝鮮語には典型的な条件を表す副動詞の他に、時間的副動詞に焦点助詞が結合することによって条件あるいは逆条件を表す場合がある。本発表ではそのような「時間的副動詞 + 焦点助詞」に着目し、条件的意味を表す場合の体系を提示した。対象とした副動詞接辞は *-ko*, *-kose*, *-(a/e)se*, *-taka*, 焦点助詞は *=(n)un*, *=to*, *=(i)ya* である。本発表では (1) 条件節と帰結節の述語, (2) 「時間的副動詞 + 焦点助詞」条件文の分類という観点から考察した。結果として、焦点助詞 *=(n)un*, *=(i)ya* が結合した場合、帰結節の述語は否定形や否定的な内容を表す述語、あるいは疑問形で現れ、特に *-ko*, *-kose* は条件節も否定形になることを示した。また、条件文を大きく現象／判断条件と働きかけ条件に分類し、「*-ko*, *-kose* + 焦点助詞」は主に現象／判断条件を、「*-(a/e)se*, *-taka* + 焦点助詞」は働きかけ条件を表すことを明らかにした。本発表ではさらに、「時間的副動詞 + *=(n)un*」とテハを対照するために、それぞれが表す意味を反復、習慣、逆接、事実条件、現象／判断条件、働きかけ条件に分類したうえで意味地図を提示した。

本発表をめぐっては、本発表で採用されている、角田美枝（2004）による節連結の機能的分類と韓国語のそれぞれの副動詞が形成する節の従属度が対応していないという問題、特に主節が反語となる「時間的副動詞+焦点助詞」構造においてどこが焦点となっているのか（反語文がどのような情報構造をとるか）という問題、主節が反語となる「時間的副動詞+焦点助詞」構造と日本語の係り結びの関連、他の「アルタイ型」諸言語において類似の構造が見られるか、あるいはどのように異なるかといった議論が行われた。

2. 蝦名大助（AA 研共同研究員，関西国際大学）

「カムサ語の類別詞」

カムサ語には約 20 の類別詞（接尾辞）が認められる。類別詞は名詞語根または形容詞語根に付く。名詞語根の中には類別詞をとるものととらないものがあるが、とるものは、類別詞が付いて初めて自立形式になる。それぞれの名詞語根は決まった一つの類別詞しかとらないことが多い。

形容詞は、名詞を修飾するとき類別詞をとらない。形容詞が名詞句の主要部として機能するとき、類別詞をとる。すなわち類別詞付加は形容詞を名詞化する役割を果たしている。

類別詞をとらない名詞であっても、これを形容詞で指示するとき、その形容詞は指示される名詞に対応した類別詞をとる。すなわち、それぞれの名詞がどの類別詞に対応するかは（おおむね）決まっており、名詞クラスがあると考えることができる。

場所名詞の中には、ある種の場所格をとってはじめて自立形となるものがある。この点で、類別詞と場所格は似ているといえるが、このような場所「格」は格ではなく類別詞なのではないかという指摘があった。この問題について今後検討する必要がある。

本発表をめぐっては、本発表で扱われている類別詞がバントゥ諸語に見られる名詞クラスに似た特徴を持ち、類別詞と場所格を同一の枠組みで捉えることにより、よりバントゥ諸語に見られる名詞クラスと共通する特徴を捉えられるのではないかという指摘や、カムサ語の動詞における接頭辞優位の形態構造が孤立語に起源をもつ膠着型言語の特徴に類似するとの指摘がなされ、接頭辞優位というアルタイ型言語の特徴に反する言語特徴を持つ言語の発展過程に関する議論がなされた。

研究会では、2 件の研究会に引き続き、今後の研究計画についての相談が行われた。

出席者は 15 名（全て当該課題を構成する所員・共同研究員）であった。

以上
（文責・児倉徳和）